



無為の境地

Guido  
van  
der  
Werve  
Solo  
Exhibition  
killing time



第8番「心配しなくても大丈夫」  
Nummer acht, Everything is going to be alright

*killing time* is the first large-scale exhibition in Japan to focus on Guido van der Werve's work over the past decade. Van der Werve began by making performance based video works in 2000. Having a background in music, Van der Werve, who also writes the music scores for his films, tries to create visual art that communicates as directly as music.

Using two gallery floors at @KCUA, this exhibition brings together seven video works. By mapping the connections between Van der Werve's interdisciplinary video works, this exhibition at @KCUA seeks to illuminate the dynamic interplay between the artist's subject matter and artistic motivations, as well as highlighting his sincere gesture and profound capacity for creating artwork. This exhibition will be an invaluable experience and a great chance for audiences to witness both Van der Werve's work and the essence of the Dutch contemporary art scene.

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA では、新進気鋭のオランダ人作家グイド・ヴァン・デル・ウェルヴェの個展「無為の境地」を開催いたします。ウェルヴェは海外の美術館での大規模な個展や国際展へ数多く出展するなど、今もっとも注目を集めているアーティストの1人です。日本初個展となる本展は、最新作を含む全7作品を展示紹介します。

ウェルヴェは2000年からパフォーマンスの記録を基にした映像作品を制作しています。幼少期からクラシック音楽の教育を受けたウェルヴェは、作品に使用する楽曲も自身で作曲しており、音楽のように直感的に伝わる視覚芸術を理想としています。

本展は、過去10年間の作品群を回顧的に展示することで、ウェルヴェの領域横断的な作品に通底する主題と創作への動機の相互関係を解明かし、作家の制作に対する真摯な姿勢と卓越した才能を明示することを目的としています。また、本展はウェルヴェの作品を通して、オランダ現代美術の最前線の表現をご覧いただける貴重な機会となるでしょう。

2016 February 20 Sat - March 21 Mon  
Kyoto City University of Arts ART GALLERY @KCUA  
グイダ・ヴァン・デル・ウェルヴェ・ソロ・エキジビション・キリング・タイム  
2016年2月20日土-3月21日月・祝  
京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA アクア

Open Hours 11:00-19:00 (Admission before 18:30)  
Closed on Monday except for March 21, Japanese National Holiday.  
Artist Talk and Opening Reception

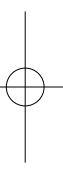
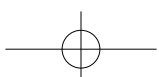
February 21 Sun  
14:00-17:00

Co-located Exhibition Yuki Okumura solo exhibition: Na

開館時間●11:00-19:00(最終入館 18:30)  
休館日●月曜日、ただし3月21日(月・祝)は開館  
アーティストトーク+オープニングレセプション●

2月21日(日)  
14:00-17:00

同時開催●奥村雄樹個展「な」



グイド・ヴァン・デル・ウエルヴェは、自らが行ったパフォーマンスの記録を基にした映像作品を制作しています。幼少期からクラシック音楽の教育を受けたウエルヴェは、パフォーマンスとしてもピアノの演奏を行い、作品に使用する楽曲も自身で作曲しています。また、マラソンやアイアンマン・トライアスロンなど、忍耐が必要とされるスポーツへ造詣が深く、作品中でも身体を酷使するパフォーマンスが目立っています。例えば、第9番「世界と一緒に回らなかった日」【※1】では、ウエルヴェは地理上の北極点に立ち、24時間かけて地球の自転と反対に回り続けることで、文字通り「世界と一緒に回らなかった」パフォーマンスを行いました。

映像の撮影手法は、シンプルな定点撮影から大掛かりなクレーンを使用したものがあり、映像フォーマットも16mm、35mm、最新の4K等と幅広く、70年代のビデオ・アートにみられるような粗野な映像から劇場用映画のようなハイクオリティなものまであり、内容に合わせた豊かな映像表現が特徴です。作品で常套される静的なカメラワークとバランスの取れた構図は、オランダ黄金時代の風俗画を彷彿させ、映像の情緒的な美しさを一層引き立てています。

代表作である第14番「郷愁」【※2】では、ウエルヴェはワルシャワの聖十字架教会からフレドリック・ショパンが埋葬されているパリのペール・ラシューズ墓地までの1703.85kmを、トライアスロン（水泳、自転車ロードレース、長距離走）で走破しました。ショパンは20歳で故郷のポーランドを離れ、38歳でパリで亡くなるまでの18年間、一度も故郷に帰ることができませんでした。亡骸はパリのペール・ラシューズ墓地に埋葬されましたが、遺言により心臓だけがポーランドのワルシャワの聖十字架教会に安置されました。ウエルヴェは、郷愁の念により分かれた「心臓」と「身体」に人間が内包する根源的な悲哀を見出し、パフォーマンスを以てその物理的な距離を内在化しました。本作品はトライアスロンの記録映像と、作家が幼少期から憧れるアレクサンドロス3世の史話、ウエルヴェの幼少期の記憶を題材にした3つの映像が、ウエルヴェが本作の為に作詞作曲したレクイエムと共に、交互に展開する長編作品です。ウエルヴェは、パフォーマンスのドキュメントに歴史的題材と個人的な記憶を織り交ぜることで、抽象性の高い自伝的な映像作品として完成させました。

黒いランニングウェアに全身を包み、ヨーロッパの広大な大地を走り続ける孤独な作家の姿は、ドイツ・ロマン主義画家カスパー・ダーヴィト・フリードリヒの「海辺の僧侶」に重なるでしょう。しかし、ウエルヴェの表現に同時代性を与えているのは、そのようなロマン主義的なノスタルジーではなく、実際に北極点に立ち続けることや、1703.85kmの距離を走破することにある真剣さと愚かしさの諧謔であり、それは現代に生きる作家自身に向けられたアイロニーとユーモアなのです。

現代のアーティストにとって、18世紀の芸術家達のように人間の存在に関わる根源的な命題に向き合うことは有効なのでしょうか。ウエルヴェはそれを否定するかのように、本展の出展作品について「共通しているのは、全ての作品が暇つぶしだといえること」と言いました。一方で、作品中の忍耐を必要とするパフォーマンスは、ウエルヴェがそのような命題に沈潜する自問のプロセスのようにも見え、その矛盾を孕む行為が中心に据えられている作品は、破壊的な欲望に突き動かされ到達する「無為の境地」を映しているといえます。そこでは「重苦しい命題」はアイロニーとユーモアによって「軽い問いかけ」となり、懐旧と新鮮さをもって現代に生きる私達の心に響くことでしょう。

#### グイド・ヴァン・デル・ウエルヴェ

1977年、オランダ・パーペンドレヒト生まれ。現在はハッシ（フィンランド）、ベルリンとアムステルダムを拠点に活動している。主な個展として、シアトル美術館、アムステルダム市立美術館、Luhring Augustine（ニューヨーク）、Marc Foxx Gallery（ロサンゼルス）等で開催されたものがある。グループ展では、ニューヨーク近代美術館、MoMA PS1（ニューヨーク）、ハーシュホーン博物館と彫刻の庭（ワシントンD.C.）、NCCA Moscow、台北現代美術館、コーチ=ムジリス・ピエンナーレ（インド）、シドニーピエンナーレ等に出演した。ニューヨーク近代美術館、ハーシュホーン博物館と彫刻の庭（ワシントンD.C.）、ルイ・ヴィトン財団美術館（パリ）、アムステルダム市立美術館、ポイマンス・ヴァン・ペーニンゲン美術館（オランダ、ロッテルダム）等に作品がコレクションされている。

主催●文化庁（平成27年度 次代の文化を創造する新進芸術家育成事業）、京都市立芸術大学  
共催●公益財団法人京都市芸術文化協会（京都芸術センター）  
助成●モンドリアン財団、オランダ大使館



京都市立芸術大学  
Kyoto City University of Arts

@KCUA  
KYOTO CITY UNIVERSITY OF ARTS ART GALLERY



【※1】第9番「世界と一緒に回らなかった日」  
Nummer negen, *the day I didn't turn with the world*  
time-lapse photography to HD VIDEO, 8'40", 2007



【※2】第14番「郷愁」  
Nummer veertien, *home* 4K VIDEO, 54'00", 2012

#### Guido Van der Werve

Van der Werve was born in Papendrecht, the Netherlands and currently lives and works in Hassi (Finland), Berlin and Amsterdam. He held numerous solo exhibitions at major museums and international galleries such as Seattle Art Museum, Steijk museum (Amsterdam), Luhring Augustine (New York), Marc Foxx Gallery (Los Angeles). Selected group exhibitions include shows at MoMA (New York), MoMA PS1 (New York), Hirshhorn Museum and Sculpture Garden (Washington D.C.), NCCA Moscow, Museum of Contemporary Art Taipei, Kochi-Muziris Biennale 2014 (Kochi, India), Sydney Biennale. His works are collected at MoMA (New York), Hirshhorn Museum and Sculpture Garden (Washington D.C.), LVMH (Paris), Steijk Museum (Amsterdam), Museum Boijmans van Beuningen (Rotterdam, Holland).

Organized by Japanese Agency for Cultural Affairs and Kyoto City University of Arts  
Co-organized by Kyoto Arts and Culture Foundation (Kyoto Art Center)  
Additional support provided by Mondriaan Fund and Embassy of the Kingdom of the Netherlands

地下鉄「二条城前」駅(2番出口)徒歩約3分 市バス「堀川御池」バス停下車すぐ  
〒604-0052 京都市中京区油小路通御池押油小路町238-1 電話075-253-1509  
<http://gallery.kcuu.ac.jp>

KYOTO  
ART  
CENTER  
京都芸術センター

文化庁  
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

M  
mondriaan  
fund